

# 歴史学習の狙いと「楽しい授業」

—— 歴史教育の基礎に関する一考察 ——

岩 崎 好 成

Long-range Objectives of History Teaching and Delightful and Interesting  
Learning as a matter of Great Importance

IWASAKI Takashige  
(Received October 15, 1998)

## はじめに

“小学校教師になったら、歴史学習を通じて、どのような力を子どもに付けさせたいか、どんな子どもに育てて中学校にバトンタッチしたいか、要するに、あなたの歴史学習でも大切にしたいことは何か。あるいは、あなたが中学校社会科教師ならば、小学校歴史学習の目標・狙いとしてどのようなことを期待するか。・・・平凡に聞こえるかも知れないが、まさに現在（いま）、目標・狙いとして筆頭に挙げられるべきは、歴史好きにすること（＝歴史嫌いにしないこと）、そのために楽しい授業を目指すこと、ではないか。あなたはどうか考えるか。”

以上は、97年度開講の「初等科社会（＝歴史学概論）」第7回講義（最終講）において、筆者がその検討を求めて受講生に問いかけた事柄である。「初等科社会」とは、一年次後期に開講している初等教育教員養成課程の「教科に関する科目」のひとつに当たり、筆者は、そのうちの歴史学に関するクラスの前半7回分を担当している。この講義はまた、中学校教員養成課程の入門講義「歴史学概論」として同課程所属学生にも開かれている。

本稿は、この「初等科社会（＝歴史学概論）」の第7講の実際の講義内容・あり様、そこにおける筆者の意図、および本講への受講生の感想等を紹介・吟味することを通して、広くは、今求められている（小学校）歴史教育のあり方、狭くは、今求められている小（中）学校教員志望学生にたいする歴史（教育）学講義のあり方の一端を、筆者なりに検討しようとするものである。

なお、本講義第6講までの具体的内容・筆者の意図等に関しては、既に二つの別稿で報告・検討をおこなっている。ごく簡単に振り返っておけば、第4講前半までを扱った第一稿は<sup>(1)</sup>、明治以降の桃太郎ばなしの中身の変遷の紹介を出発点に、歴史像の書き換え・歪曲の問題を扱い、歴史学のルール＝実証と論証の絶対性を論じたものである。その際、本稿の論点とも大いに関わるが、日本の現状（現代）を反映させた新たな桃太郎ばなし創りをアンケートの形で受講生に課し、その回答結果を過年度のそれを含めてベストテン風に紹介して楽しむ、ということを試みている。第二稿はその後の講義展開を報告したもののだが<sup>(2)</sup>、そこでは、〔歴史を学ぶ教える理由〕と〔歴史観をめぐる諸問題〕を扱っている。この二つに対し筆者が言わんとしたことは、前者については「理由」を自らに問うこ

との重要性、後者については「歴史観は多様で自由、正しい歴史観などない」である。

また、この第二稿の「はじめに (=序)」において、筆者は本講義の全体的構造を呈示しておいた。本第三稿の位置づけを明確にするため、以下、その要点を再録しておこう。すなわち、先ず、7回にわたる本講義の内容を構想するに際し、筆者が基盤に据えた問題設定は、「いわゆる教科専門歴史学担当教員が小(中)学校教員志望学生に対し、今、伝えておくべき歴史学上歴史教育上必須の基本事項とは何か。そしてそれをどう伝えるか。」である。これに対し、筆者が絞り出した回答、すなわち「今、伝えておくべき・・・必須の基本事項」は、次の五点になる。

- ①歴史を語り学び研究し教育する際には踏まえねばならないルールと言うべきものがあり、それが実証性と論理的整合性である。
- ②人が歴史を語り学び研究し教育する際、意識するにせよ無意識にせよ、その立脚点になっているものがあり、それが各人固有の歴史観である。歴史観は多様であり、自由である。正しい歴史観などというものはない。
- ③今(も昔も)、子どもが歴史学習の時間を生き活きと過ごし、歴史学習を通して歴史好きになること、これに勝る成果というものはない。したがって、ひたすら、あるいは他の何よりも先ず、楽しい授業になるよう目指すことが肝要ではないか。
- ④以下の問いの重要性を認識し十分検討せよ——「歴史の勉強は何の役にたつの?なぜ過去のことなんか学ぶの?学ぶと何が得られるの?」という子どもの質問に答えよ。
- ⑤以下の問いの重要性を認識し十分検討せよ——小学校教師になったら、歴史学習を通じて、どのような力を子どもに付けさせたいか、どんな子どもに育てて中学校にバトンタッチしたいか、あなたの歴史授業で最も大切にしたいことは何か。要するに、あなたの歴史学習上の狙いは何か、一、二点に絞って答えよ。

したがって、上述の如く、第一稿では①に、第二稿では②と④に焦点を合わせた講義の内容・あり様を報告・分析したわけである。そして、本稿冒頭に掲げた「最終講において、筆者が受講生に問いかけた事柄」とは、⑤(の問い、それへの提言としての)③にもとづくものということになる。

さて、なぜ筆者がこの二点を「必須の基本事項」に入れたか、については後述することとし、先ずは、⑤の問い(アンケート)にたいする受講生の回答例を紹介することから本稿を開始しよう。

## 1. 小学校歴史学習の狙い——受講生へのアンケートの結果

受講生は、果してどのような小学校歴史学習上の狙い・目標を設定したのであろうか。以下に列挙したのは、その回答例である。なお、これらはプリントにして既に第6講時に配付してあり、アンケートそのものは、第5講終了時に課題を提示し、翌日回答を提出させている。その際、中学校教員養成課程所属学生には、冒頭に示したように、「小学校歴史学習の目標・狙いとしてどのようなことを期待するか」と問うてある。

また、以下の回答例を紹介するに際し、筆者が付したコメントは次の四点である。

- (1) 個々の単元・授業の狙いではなく、「歴史学習を通じて、どのような力を子どもに付けさせたいか」という長期的な狙いを持つと持たぬとでは、歴史学習のあり方に大きな違いが生じるのではないか、たとえば年間計画策定において、たとえば教科書への依存度において、たとえば個々の単元・授業の目標設定において。

- (2) 「どんな子どもに育てて中学校にバトンタッチしたいか」という狙いを意識して初めて、小学校歴史学習固有の任務に思いを馳せるのではないか。
- (3) 狙いがあって初めて狙い達成のための手立てへの工夫が生じよう。あなたは、自身の狙い達成に向けて、どういう手立てを講ずるつもりか。
- (4) 他の人の回答を大いに参考にしつつ、再度、自身の狙いを考えるとよいだろう。

★私が小学校教師であるとして

- ・歴史に関する細かな知識などは中学や高校で習得できるので、子ども達が歴史を好きになるようにしたい。子どもも一緒に参加できる授業をして、歴史に苦手意識をもたないような子にしたい。
  - ・歴史を学ぶことにたいする意欲や、歴史にたいして興味をもてるような子どもにして、中学校にバトンタッチしたい。
  - ・暗記させるだけの授業は絶対したくない。歴史を学ぶことを楽しいと感じ、子どもがいつでも興味・関心をもって授業に取り組めるようにしたい。
  - ・今の時代がどのような経過をたどってつくられてきたかをたどるとともに、人物を中心にその時代背景を学ばせ、だいたいの歴史の流れが把握できるようにさせたい。
  - ・様々な事象や事柄に対して、それを知識として鵜呑みにするのではなく、「なぜそのようなことが起きたか」など、自分なりの疑問をもったり、興味・関心のあることに注目したりして、それらのことを調べたり追求したりすることができるようにしたい。
  - ・何かひとつでも（ひとりでも）興味のある出来事や人物について、様々な角度から追求できるようになる力をつけてあげたい。（例えば源平合戦について、源氏側からも平家側からも調べたりできること）。
  - ・歴史について、どんな小さなことでもいいので興味をもって、自ら探究しようとする力を身に付けさせたい。
  - ・疑問をもつ子ども。先生から教えられたことをそのまま受け入れたり暗記するのではなく、「どうしてそうなるのか、なぜなのか」と疑問をもって、自主的に調べたり質問できたりする子ども。
  - ・歴史学習を通じて、いろいろなものの見方や考え方を養う基礎を身に付けさせたい。
  - ・歴史学習を通じて、社会的事象に関して、他者の意見に流されず自分の意見をしっかりともてる子どもに育てたいと思う。
  - ・今の自分たちの“生きる”という行為そのものが、日本の国づくりに大いに反映される。つまり国というものは、自分たちの考え方、行動によって左右されるものだという事に気づかせたい。歴史は繰り返すと言われるが、これは常に、人々が全力で生き抜いていたという現実を指すのである。
  - ・歴史は人間そのものだ。例えば、この土地が欲しいから侵略するとか、あいつが気に入らないから殺すとか。歴史を学ぶことを通して、子どもたちに人間を学んでほしい。
  - ・主に戦争のことなどについて、子どもたちに理解を深めさせ、再び恐ろしい戦争を起こさないように、平和的に社会を形成していく力を身に付けさせる。
  - ・差別や偏見によって起こった悲惨な事件などに触れることによって、差別に対する知識やそれを止めさせる勇気をもった子どもになってほしいと思う。
- ★私が中学校教師だとするならば、こう願いたい。

- ・歴史は暗記ではないということをよく教えておいてほしい。何でもいいから興味をもたせてほしい。
- ・社会という教科は、ある問いかけに対する特定の答え（単語）を暗記するものであると思われがちである。しかし、さまざまな時代のエピソードなどに思いをはせて、歴史を楽しむ余裕をもって学習してほしいと思う。
- ・子どもたちが、好きな歴史上の人物を見つけることができるようにしてほしい。そして、歴史のある一時点でもいいから、興味をもって中学校にきてほしい。
- ・ある事象についての歴史的意味あるいは意義を自分自身で考える、という癖を身に付けさせてほしい。とにかく、よくわからなくていいから、まず自分で考えようとする態度を身に付けることが、その後の歴史授業を実りのあるものにしていくと信じているから。
- ・こまかい人名や文化財などでなく、おおまかな歴史の流れをつかんでほしい。
- ・自分たちで、人物について調べまとめる（発表する）力を身に付けておいてほしい。
- ・受け身的な科目にならないようにするためにも、「なぜこうなのか」という疑問をもって歴史を学び、そして様々な資料で調べてみたり、資料から理解したり、いろいろなことを読み取ってもらいたいと思う。
- ・第一に戦争について教えてもらいたい。特に、太平洋戦争や日本がアジア諸国に対して行った侵略について。戦争がいかにむごたらしく悲惨であるかを重点的に教えてほしい。
- ・歴史に興味をもたせるため、文化的なことがらについて教えてほしい。また、戦後の発展が必ずしも良い方向に向いているわけではないことを教えてほしい。地球的な環境破壊に興味を向けさせてほしい。

## 2. 先学に学ぶ「狙い」と「手立て」——第7回講義

続いて講義では、「歴史学習の狙い（およびそれを達成する手立て）について、先学（先輩教師）に学びながら考える」と題して、以下に示す如く、六氏の主張・考え方を紹介した。その際、紹介に先立って、次のようなコメントを付しておいた。

「先のアンケートの回答例の受け止め方と同様、ここでも先学の考え方を知り、それを大いに参考にしながら、再度、自分なりに『狙い』を考えてほしい。そして、断続的で構わないから考え続けてほしい。“（歴史）学習の狙いをたてる、問う”という根源的な営みを多少とも意識するか否かは、たとえば今後三年間の大学での（社会科教育関係）講義に対する姿勢・受け止め方に差異をもたらすのではないか。」

「私（＝筆者）自身は、子どもを歴史好きにする、少なくとも歴史嫌いにしないことが（小学校）歴史学習の最高目標だと考えている。そのためには、楽しく面白い授業になるよう目指すことが肝要である。特に今、これを蔑ろ・後回しにした歴史学習は、いかに中身が濃かろうがほとんど生徒に共有されることはないのではないか。（その意味では、紹介する六氏の選択には一定の偏りがあるろうし、若干紹介する授業のあり様も『楽しい授業』に関わるものに限定されている。）」

「紹介したものの出典はすべて配付プリントに明記してある。是非、一度手にとって読み、気に入ったものは購入するとよい。そして将来、そこに描かれている授業実践例の一、二を模倣することから、各自の工夫を開始したらよい。」

○さて、六氏の主張のうち最初に紹介したのは本間昇のそれである。氏は、小学校歴史学習の狙いとして、次の三点を挙げている<sup>(3)</sup>。

①歴史学習の意欲をもたせること。(意欲さえもてば、その時点での知識が少なかったり偏ったりしていても、自分の力で知識を蓄え矯正していく。)

②歴史を調べる力を育てること=資料活用トレーニング。(学習意欲があっても学びようがわからなければ何にもならない。)

③歴史を通して社会や人間を見つめさせること。

併せて、氏の次のような言葉もプリントに掲載しておいた。「くれぐれも心すべきことは、消化不良の知識を詰めこもうとしたり、知的好奇心を少しも刺戟しないたいくつな授業をくりかえし、子どもたちをして歴史嫌いにしないことである」。

○次に有田和正の考え方を紹介した<sup>(4)</sup>。

氏によれば、「歴史を好きにすることが先決」であって、「むずかしいことを考えないで『歴史を楽しませる』ことが大切」である。と言うのも、「子どもたちは、おもしろいこと、楽しいことが好きであり、「授業でも、少しおもしろいと身をのり出してくるが、おもしろくないとソッポをむく」からである。では、楽しませる面白がらせるにはどうしたらよいか。氏は、「おもしろいネタをみつけて、授業にもちこ」むこと、あるいは、「おもしろい問題史」を試みることを提案する。すなわち、「子どもたちの常識をひっくり返す」ものや、「身近な食べ物やトイレの歴史、あかりの歴史、物語や歌の歴史、等々、子どもたちの生活に密着した内容」を授業で取り上げるのである。そうすると、「子どもはムキになって調べる。自分が主体となって歴史を追究することになり、歴史がおもしろくてたまらなくなる」。

そこで講義では、有田の主張を実感してもらうために、また受講生が身に付けてきた歴史知識の偏り・抽象性を実感してもらうために、氏に做って次の二点を問うてみた<sup>(5)</sup>。

①源氏物語絵巻を見ると、十二単の女性が右手で扇をもって顔を隠して廊下を歩いている。これはなぜ？

②大名行列中、殿様がトイレに行きたくなくなったらどうしたか？「野グソ」をしたのか、近くの農家に駆け込んだのか、かごから「垂れ流し」たのか、「厠かご」に乗り移ったのか、次の宿場までがまんしたのか？

ちなみに、問いそのものは前講終了時に提示し、その回答結果・正解をこの第7講の場で披露した。その際①については、平安貴族の衣食住に関する資料をプリントで併せて紹介し<sup>(6)</sup>、また②については、参勤交代の実際(費用・スピード・宿・庶民の受け止め方など)を口頭で解説した<sup>(7)</sup>。更に②の延長線上に、田所恭介・谷田川和夫編集の実践書を利用して、屋敷の門構えから大名間身分格差を知るクイズをプリントに掲載して受講生とともに楽しんだ<sup>(8)</sup>。

○次に紹介したのが山本典人の主張である。氏は次の三点を小学校歴史学習の狙いとして挙げている<sup>(9)</sup>。

①歴史の好きな子どもに育てる。歴史的な事件や人物におもしろさを感じ、むかしを想像したり、歴史の本を読んだり、フィールドワークなどを楽しむ。

②歴史的に考える力を育てる。むかしはどうだったのだろうかと歴史を想像したり推論したりする力を育てる。とくに歴史は民衆の力によって発展してきた。これからも民衆の力によって発展させなくてはならないという意識を育てる。

③苦難をのりこえて生きる力を育てる。大むかしから人間はどのように生きてきたのか、今はどのように生きているのか、これからどう生きようとしているのか、ここに焦点をあ

て、たくましく生きる子どもを育てる。歴史教育は歴史のなかで人間がひたむきに生きぬいてきた姿をこそ実証的実感的に学びとらせなくてはならないだろう。

講義では、③において「実感」だけでなく「実証」が併記されている点に注意を促した後、①について次のように解説した。すなわち、「歴史の好きな子どもに育てる」ために、氏の授業では、教室にモノを持ち込む、作る、それを使って即興劇をやるといった工夫がなされている。たとえば、理科教材用の人体模型を使って（杉田玄白や前野良沢の）腑分けを演じさせたり、自由民権運動家の演説会を開いたり、国会開設の請願書を作成して子どもに署名させたり……。更に資料プリントで、氏の実践書にある〔道長になって歌をよむ＝写真〕〔道長になったつもりの子どもの詩〕〔「竹取物語」を硬筆で模写した子どもの作品〕〔子どもが作成した絵入りの年表〕を紹介し、理解を深める一助とした。

また、同プリント上には、氏の構想する独立単元22のタイトル一覧表と「くし団子」型授業構造図を掲載し、次のような氏の主張を紹介した<sup>(10)</sup>。「小学校の歴史教育は教科書内容や歴史事項をぎゅうぎゅう押しこむことではなく、『少なく教えて深く考えさせる』こと、『早く芽を出せ柿の種』ではなく、『ゆっくり根を張れ柿の種』でなくてはならないように思う。これはわたしの通史学習否定、独立単元の主張にも通ずる。」

その際筆者が付言したのは、いわゆる「万遍なく教える」の非現実性（＝そも万遍なく教えることなど不可能であること）と、教科書読みの効用（＝「教科書を一通り教える」ことにこだわるのであれば、簡単に解説を付しながら教科書読みを短時間で行えば、生徒・教師の不安は解消され、残された時間を有効活用できる）である。

○続いて（「狙い」を直接扱ったものではないが）、山本の「歴史の好きな子どもに育てる」ための工夫との関連で紹介したのが、田所恭介の分析である<sup>(11)</sup>。

氏は、卒業前の子ども達に「どんな歴史の授業が印象に残っているか」と問い、そのアンケート結果から、人気のあった授業の性質を五点にまとめ、「子どもたちの多くは、授業方法と提示された教材のなかの『モノ・ヒト・コト』を関連させてコメントしています。そのドラマチックな出あいこそ、子どもたちの求めている『学び』を保障する前提ではないでしょうか」と結論している。以下に掲げるのがその「五点」である。

- ①「生き方」につながる・・・具体的な事件（人物）を通して、歴史を築いてきた（生きて働く）人間に共感
- ②楽しくなくちゃ・・・「今日は何かあるぞ」と思わせる導入（もの——実物・レプリカ・絵など）
- ③「これだけは（学んでほしい）」というねらい・・・物語などでイメージが豊かに広がり、熱いものを感じる
- ④難しい（知らない）ことにハッとさせる・・・絵（絵本）、写真などから、どうなっているんだろうと考える
- ⑤バラエティに富む授業方法・・・クイズ、ものから導入。物語の一部分の劇化や裁判のような討論。一枚の絵から問題を設定し調べ話し合う

○次いで紹介したのが河崎かよ子の所論である<sup>(12)</sup>。

これは、歴史学習というより社会科学学習を、また、「狙い」というより「役割」を論じたものだが、歴史学習の狙い・手立てを考える上で有益と判断し、その一部をプリントに掲載した。時間の制約上、講義後の熟読玩味を要望しつつ、下線を付しておいたのは、たとえば次のような氏の主張である。

「くらしのなかで目にするもの体験したことのすべてが社会科の対象であるということは、どの子にとっても開かれた窓があるということで、誰でも授業に参加できるし、どの子にもわかる内容を含んでいるということである。どの教科でもそうであるが社会科の授業ではとくに、子どもの発言はすべて取り上げ位置づけることができる。その場で考えたことはすべて意味があり、それはとても大切なことなのだとわかった時、子どもの姿勢は変わってくる。」「学習意欲に乏しいと思われる子どもたちも、学習の意味がわかり、楽しく気楽に活躍できる場があれば、いきいきと参加するのである。やはり子どもたちは賢くなるのが好きなのだ。」

また、山本の言う「生きる力を育てる」、田所の言う「生き方につながる」と関連することから、あるいは、子ども達をとりまく「現在(いま)」を踏まえた上での言葉であることから、次の主張にも同様に下線を付しておいた。

「荒れた六年生の子どもたちでも戦争を止めるために闘った人の話には目を光らせて聞き入った。それは自分たちの願いに一致し、子どもたちの生きる力を励ますものであったからではなかったか。・・・農業学習をすれば農業がいやになった、歴史学習をすれば日本がいやになった、どうしたらいいのかわからなくなる、というのでは『生きる力』にはならない。見通しをもつのはむずかしい日本の農業のなかでも、新しい道を切り開いて納得のいく仕事をしようがんばっている人たちはいる。止めることのできなかった十五年戦争のなかでも、反戦を闘った人はいる。そのような事実に触れること、そのように積極的に生きた人々に出会うことは、自分の可能性が信じられず未来が信じられない子どもたちを励ますものである。」

○最後に、受講生の中には中学校教員養成課程所属学生もいることから、中学校歴史学習に関する安井俊夫の主張を取り上げた。

もっとも筆者は、歴史学習の狙いは小学校でも中学校でも本質的に変わりはないと見なしており、また、安井の主張は一部を除き小学校においても適用可能と考えている。さて、氏は次のように述べて、二つの狙いを示している<sup>(13)</sup>。

「私は社会科の目標を『主権者になりうる基礎的な力』をつけることにおいて・・・。歴史の授業は楽しい授業でなくてはならない。そのことはどこまでも貫いていきたい。が、そのなかで『主権者になりうる基礎的な力』つまり『生きる力』を子どもにどう獲得させるかを求めていかななくてはならない。」

氏によれば、子どもが「歴史はおもしろい、楽しい」と言うのは、「自らの追求で何かを得られるようなかたち、いわば『与えられる』のではなく『学びとっていく』というかたちになっているとき」である。そして「学びとっていく」とは、歴史の事実・知識を「自分の目でとらえ、『自分のもの』にすることであり、「歴史の知識が子どもの中でそういう生きたものとなっているならば、それはさらに現代の日本や世界に対する自らの意見を形成する時に駆使されるものとなる」のである。

では、「学びとっていく」という形にするにはどのような授業であればよいのか。氏によれば、授業過程においては、そこに生きる具体的な人間の姿に注目し、その人間に「共感」しながら(=感情をおつけながら)ともに考えていく、という営為が決定的に重要であり、またその際、子どもには、感じたこと考えたことを発言できる場が与えられなければならない。そして対象となる題材は、子どもの共感を誘う(=感情をかき立てる)、子どもの問題意識(=疑問)にそった、楽しい、絞り込まれたものが希求されることにな

る<sup>(14)</sup>。

講義では以上を、特に「共感」については、家康の肖像画を利用した氏の実践〔家康はすごいやつか〕を例に説明し、また「題材」については、氏が子ども達に配付してその学習意欲を喚起することに成功した〔「世界の古代文明」の授業プラン〕をプリントに掲載して、その実際を学んだ<sup>(15)</sup>。その際、特に「授業テーマ」＜“ピラミッドの秘密”における（授業で）やること＞に注目し、こういう中身こそが、子どもが入りやすい「子どもの問題意識にそった、楽しい」ものである点を指摘し、また、そも、こういう授業プランを作成・配付する労をとるか否かが、教師としての岐路ではないかと付言した。なお、＜やること＞の中身は次の通りである。「ピラミッドの石は全部でいくつあるか。どこからどうやって運び、どのように積み上げていったのか。働いたのはどんな人たちか。葬られたのはどんな人か。中はどうなっているのか。」

以上の紹介の後、わずかの時間ではあったが、〔補論〕として次の二点に絞り込む形で筆者の「楽しい授業」への私見を述べておいた。

□「わかるから楽しい授業」と「楽しいからわかる授業」について

ここでは、あえて、授業を、「多少苦しくても難しくても、それを経て少しずつ、あるいは最後にわかることによって楽しく感じる授業」と「先ず楽しさの全面展開があり、その中で（＝楽しさに動機づけられて初めて）わかっていく授業」とに二分類し、今（とくに小学校で）、求められているのはどちらかを受講生に問うた。

これに対し筆者は私見として、君たちがしばしば大学で経験しているように、前者だけでは子どもにはキツく、自ずと受け身になってしまうのではないかと、そも本講義からして、桃太郎アンケート等がなかったなら君たちの受講姿勢に違いが生じたのではないかと。いづれにせよ、「楽しいだけではダメだ」という発想を教師は一旦捨てるべきではないかと、楽しませるには教師に多大のエネルギーが要請されるのであり、そも、楽しませることのできない教師（・授業）にわからせることなどできるのか。更に、一体小学校で何を“苦行”の後にわからせるのか、そのようなものが果して存在するのか、小学校に限らず、そも子どもの主体性を欠いたところでの＜わかる＞とは一体何の謂か、等々を述べた。

□「中学校では、受験に備えて万遍なく教科書を教えねばならない。」「受験を考えれば、楽しい授業など空論。やっている暇はない。むしろ暗記型授業の方が子どものためになる。」——これらは本当か？

ここでは、同じく極論的な内容の問いをあえて設定しつつ、受験対策を理由に「楽しい授業」を軽視・空論視することに対し、あるいは、歴史の好き嫌いを受験学力・受験対応力との相関を否定することに対し反駁を試みた。

すなわち、筆者に言わせれば、確認されて然るべきは、万遍なくとは言え教室でただ一度教科書の内容を教わっただけで受験に臨む者など先ずいない、という事実である。受験勉強という言葉が示すように、受験生は皆、教室での学習とは別に、孤独のうちに、習ったことの総復習を自らの力でせざるをえない。しかもそれは、有体に言えば、暗記という営為を多少とも強要される“苦行”でもある。これが受験勉強というものの実相であり、したがって、“苦行”の度を薄め、自らの力で勉強できる態勢を整えてやることこそが受験対策としては肝要となろう。その際、子どもが歴史好きであるかどうかが決定的意味をもつ、と筆者は考える。好きだからこそ多少の“苦行”も頑張れるのであり、歴史好き



をもたらす「楽しい授業」だからこそ理解度・印象度も深まり、結果として、“暗記のための暗記”を克服することになるのではないか。

「万遍なく教える」の実際の効用も、不十分な時間数の下では専ら、受験範囲を一通り眺めたという安心感を子どもに、そして実は教師に与える以上のものではないだろう。ならば、先に山本典人の主張を紹介する際に付言した如く、授業で本格的に扱えなかった部分は、教科書読みのような形による簡潔・短時間の言及をもって済ますことも可能なはずである。にもかかわらず、これが受け入れられないのは、率直に言って、教師にとって、教科書概説の方が「楽しい授業」を工夫するよりはるかに楽だからである。つまり、「楽しい授業など・・・やっている暇はない」のではなく、自ら「暇」を作り出そうとしないのであり、「暗記型授業の方が子どものためになる」との主張も、内実は、暗記型ないし概説講義型授業の方が教師には楽であり、かつ受験重視の保護者からの指弾を受けにくい、ということではないか。教科書を万遍なく教えつつ楽しくわかる授業も展開できる、という力量のある教師は別として、その両立が不可能ならば、上述の理由からしても、先ず「楽しい授業」が優先されるべきではなかろうか。そも、自分が担当する教科・科目の楽しさ・面白さを伝えずに子どもの大半を〇〇嫌いとなすことに、教師として耐えられるのであろうか。

このように述べた後、最後に、無論以上は自省の念を込めての発言であるが、君たちも「楽しい授業」の必要性を感じるのであれば、それを“受験対策”の名の下に切り捨てることなく、先に紹介した六氏をはじめとする<歴史好きの子ども>を目指して工夫する教師の側に立ってほしい旨付言した。また、<歴史好きの子どもに育てる>を「歴史学習の狙い」とは見做さず、あるいはそれだけでは物足りないと感じ別の「狙い」を打ち立てている諸君においても、少なくとも学習のあり方として「楽しい授業」を欠落させてよいものかどうかの検討、教わる子どもの側に立った、「狙い」達成に性急でない、肩の力を抜いた授業のあり方の検討は必要である旨伝えて結びとした。

### 3. 講義の内容・あり方をめぐって——受講生の感想・批評文から

本講義では、最終講（＝第7講）終了時に以下のようなアンケート課題五点を提示し、うち二つを選択して四日後に回答を提出するよう求めた。

- ①この講義（第1～7講）への全体的・一般的感想を書く
- ②この講義の内容を批評する——この部分はOK、細かすぎる、もっと詳しく、□□についても扱ってほしい等
- ③この講義の各種アンケートを批評する——このアンケートは必要・不必要・意味不明等
- ④再度、自分なりに「歴史学習の狙い・目標」を考えてみる
- ⑤少々、自由テーマで書く

ちなみに、この最終アンケート実施にむけて筆者が意図したのは、一つには、全体なかでも①を通してこの講義への受講生の受け止め方、たとえばどの部分が最もインパクトを与えたのか、どの程度講義内容が伝わっているのか等を知ろうということであり、いま一つには、②③を通して次年度講義の充実・改良を図らんということである。したがって、②③については受講生に、諸君の知恵を貸してほしい、と申し添えてある。また④⑤は、この講義への関わり（＝拘束）が各人にとってプラスになれば、との思いから、アンケート回答という形式・機会を提供して、自分なりに考えてみることを促したものである。

受講生59名の選択は、①50、②10、③35、④13、⑤13であったが、以下では、第7講の内容・あり方を検討するとの本稿の趣旨にもとづき、「狙い」や「楽しい授業」に関わるいくつかの回答例を紹介・分析してみたい。

#### (1) 「歴史学習の狙い」を問う意味・受講生の受け止め方

最終アンケートの④に回答を寄せた受講生は13名である。が、④を選択しなかった者の中にも、他の項目への回答において「歴史学習の狙い」を「子供を歴史好きにする」ことに定めて論を展開している者が少なくない。したがって、正確には、少なくとも13名以上の受講生が、再度、自分なりに「狙い」を考えてみたということになるだろう。

筆者がアンケートを二度設定して「狙い」、すなわち「歴史学習を通じて、どのような力を子供に付けさせたいか、どんな子供に育てて中学校にバトンタッチしたいか」を問うことを、受講生に伝えるべき「必須の基本事項」視した理由は、先に「筆者が付したコメント」として第1章冒頭で示した通りである。そこでは、狙いがあって初めて狙い達成のための手立てへの工夫が生じる点や、「バトンタッチ」を意識して初めて小学校固有の任務に思いを馳せよう点についても述べたが、最大の理由は、マクロなレベルでの「狙い」はそれがマクロなレベルであるがゆえに閑却されやすく、そうなるとマクロなレベルでの授業構想もそこには生じないことになるからである。通常誰しも、單元ごとと授業ごとの狙いは意識するのであるが、そこに長期的な「狙い」が接合しない時、事の大小軽重を曖昧にした單元構成・授業内容が幅をきかせ、えてして細かな論点過多・知識過剰のミクロなレベルで完結させてしまう閉じた学習形態がもたらされがちになるのではなからうか。

他方、本講義の展開にとっては、一旦受講生に「狙い」を問い、その回答の幾つかを披露していたからこそ、続く先学の主張の紹介に耳を傾けさせえたのであり、更にそれに刺戟されて、自分なりに「狙い」を再考する者も現れたものと思われる。そこで、その「再考」例を若干紹介するならば、たとえば、当初のアンケートでは、具体的手立てに触れることなく表面的に「歴史は暗記科目ではないという考えを身につけさせたい」とのみ答えていた受講生が、最終アンケートでは、自らの中学一年生対象の家庭教師経験上の苦労に立脚しつつ、「私は子供の素朴な問いについて一緒に真剣に考えられる教師になりたい」と述べ、あるいは、当初アンケートでは、「子ども達に次のようなことを期待したい」として子どもに要求するばかりであった受講生が、最終アンケートでは、子どもが歴史嫌いになる理由を検討しながら、そこでの教師の役割に思いを馳せ、「私は、教師が一方的に展開させていくような授業ではなく、生徒たちもきちんと参加でき、生徒も展開していけるような授業を行いたいです」と述べている。

また、最終アンケートにおいて少なからぬ数の受講生が、自らが受けてきた小学校以来の歴史授業を批判・分析を加えながら回顧し、そこから「狙い」を再考するという試みを行っている。たとえば、ある受講生は、「高校に入った時あまりに詳しい授業についていけず、歴史が好きではなかった」が、別に見せられたサテライト授業には感銘を覚えたことを回顧し、「他の先生と何が違うのか、あらためて考えてみ」ながら、結論として、「理解のできる授業、興味をひく授業がしたい」と述べている。あるいは、別の受講生は、小学校以来歴史を暗記物と捉えさせられ、特に高校では、「わかりやすい授業をしないで」「テストを多用し」「テスト範囲まで行かなかったら自分で勉強しろ」という先生の授業も受けた」がゆえに「歴史が不得意で嫌いであった」自分の経験を生かして、授業を「<苦しい>から<楽しい>へ、<暗記物>から<論述物>へと」なし、「そして授業の主人公は

教師ではなく子ども達である、ということを忘れないように」したいと述べている。また、抽象的ではあるが、当人なりの「再考」ぶりが十分伝わる回答に次のものがある。「僕は小中高（大？）、よい先生に恵まれてきたと思うけれども、先生が子どもに落胆する顔を見たことがないわけではない。・・・先生の側から見れば『何も伝わっていない、何も聞こうとしていない』ように見えるかも知れないが、それは勘違いだと思う。子どもは先生のふとした一言、ふとした仕草を一生忘れないものだと思う。僕もそんな『忘れられない一言』をもっている。そんな『忘れられない一言』をたくさん与えられる先生がよい先生なのではないか、という思いがしてならない。」

## (2) 「楽しい授業を！」（を主張する本講義のあり方）はどう受け止められたか

既に明らかにしているように、筆者は（小学校歴史学習の）「狙い」の最たるものを「歴史好きの子どもに育てる」ことに置き、それを達成するための手立てとしての「楽しい授業」への工夫を大いに奨励する立場をとっている。（より素朴・直截な物言いをすれば、生徒が一時間を生き活きと過ごし何か得るところがあったなら、少なくとも歴史嫌いにならなければそれでよい、と考えている。）したがって、第7講の講義内容が自ずとそれを反映したものになっていたのは先に示した通りであるが、同講に至る講義全体においても、「楽しい授業（＝講義）」となすべく筆者なりの工夫を試みている。と言っても、それは、初回導入時に身近な桃太郎ばなしを利用したこと以外には、毎回終了時にアンケートを実施し、その回答披露を軸に講義を展開してみたというだけのものである<sup>(16)</sup>。

問題は、これが受講生にどう受け止められたかである。この程度の工夫とは言え、たとえば最終アンケート③の回答次第では、講義の軸に据えたアンケートの活用は無用の長物と化そう。それは同時に、受講生がほぼこの講義を楽しまなかったことを意味することにもなる。（小中学校での）「楽しい授業」を標榜しようにも、それを伝えるこの講義自体が楽しめるものになっていなければ、それは説得力を大いに欠くことになる。逆に、もし受講生がアンケート活用等によってこの講義を“楽しむ”ことができ、その結果、講義内容をそれなりに“わかる”ことができていたならば、筆者の「楽しい授業」絶対必要論はその証左を見出したことになろう。最終アンケート①において、受講生はこの講義に対してどのような感想を表明しているのであろうか。そして、そも彼らは、「歴史好きの子どもに育てる」ことや「楽しい授業」をそのために工夫する、という主張を意味あるものとして受け止めているのであろうか。

さて、その受講生の受け止め方だが、35名が回答を寄せた③「各種アンケートを批評する」において、アンケート活用それ自体を全面否定した者はなく、3名がその一部について「アンケートまではする必要はない」「講義時間内に問えば済む」「歴史とは関係ない」と述べている。他はほぼ、以下に示すように、アンケートの活用を意味あるもの楽しめるものとして肯定的に受け止めている。50名が回答した①の「講義への全体的一般的感想」においても、幸いなことに大多数の受講生が、同じく以下に列挙するように、本講義のあり方を楽しみ、内容に興味を抱き、「楽しい授業」の必要性についても検討を加えてくれている。但し、2名が「少し難しいと感じる時が多かった」「全般的にかたい内容だった」と言い、1名が「この授業は講師側からの一方的な意思伝達に終わっている」と述べている。いかにも教育学部の講義なり、と斜に構えたとしか言いようのない回答者も1名いる。他に数名が、「歴史教育というものがいかに難しいかをあらためて確認した講義だった」

という類の感想を述べており、一考の余地を残すだろう。(もっとも、「難しい」の中身が各人各様で、「今まで自分が受けてきたように、教師になったら教科書をだらだら読んでいけばまあいいだろう」では済みそうもない、との意味で「難しい」とする者もいれば、自分に「楽しい授業」ができるかとの不安感から「難しい」と述べる者、あるいは、実証や歴史観の問題を誠実に受け止めて、「独断や偏見を交えず証拠を基に証明していくのは並大抵のことではない」とする者もいる。いづれにせよ、「それだけやり甲斐のあること」とこの受講生が続けて述べているように、皆決して後ろ向きの姿勢を取っているわけではない。)

### 〔③「アンケート批評」から〕

・アンケートの課題が毎回変なのばかりで面白かった。こんな事きいてどうするのかとよく思った。でも中にはすごく考えないといけないようなものもあって結構大変だった。だいたい答えのないテーマが多くて、自分の考えを書くというのがすごいよと思った。

・全体的にアンケートの内容は興味がもてるものばかりだったのでよかったと思う。特に最初の「現代の桃太郎ばなしを創る」によって、頭から私の歴史にたいする考え方をくずされたので、より興味がもてて授業に取り組むことができた。

・アンケートは必要だと思う。ただ単に講義を聞いているだけでなく、アンケートに答えることによって自分で考える力がつくし、回答紹介によって他人の意見で自分が気づかなかったことも知ることができる。でも、この講義のアンケートの最大の特徴は、その内容が私たちが子どもの立場になって考えることができるものだったということである。だから、アンケートに答えるということが他の講義では苦痛だった私も、この講義で答えるのは楽しかった。

・毎回小さな紙に書くことが成績評価につながると最初に聞いた時びっくりし、簡単な授業だなあと思いました<sup>(47)</sup>。けれど単位のことをそう気にしなくてもよかったので、かえって深く授業にのめり込むことができよかった気がします。アンケートの内容ですが、これも歴史教育における視点というものを考えさせるものだったので、一見あっさりとしたアンケートでしたが、毎回いろいろ考えて答えていました。

・アンケートは必要です。自分で回答してみることによって、実際生徒と同じ立場になることができるし、ただ聞くだけの授業では何となく満足感が得られないからです。毎回私はアンケートの質問に興味をもっていました。すごく意味不明に思われるクイズなのに、なぜか歴史の授業につながっているというところが不思議でした。

・初めの頃、「こんなアンケートやって何の意味があるんだろう」と思ったこともあった。しかし、少なくともその答えを導き出すために、そのことについて考えることができた。更に、今まで考えたこともなくさらっと流してきたようなことに注目している点がよかった。最終的には、「アンケートをやるから、もっと歴史を違う角度で見ることができるんだ」と思うようになっていた。

### 〔④「講義への感想」から〕

・「初等科社会(歴史学)」ということで、内容としては歴史の具体的内容を見ていくのかと思っていた。しかし、様々な授業の方法を見ることができて、社会科の授業とくに歴史は割に暗記色が強いものだと思っていたのが、歴史というのはこんなに身近な点から入っていけるのか、こんな授業(加藤公明実践「貝塚の犬の骨」)なら受けてみたかったな等、

色々なことを思った。私も教師になったら、子どもが歴史を好きになるような、好きにならなくても嫌ってしまわないような授業をしたい。

・この授業を受けることによって、社会科指導のあり方を深く考えさせられました。例えば桃太郎の話から、見る人の立場によって歴史が変えられることを実感し、歴史を指導する上で教科書をそっくりそのまま教えるのではなく、教師が色々な観点から考えて指導する必要性を感じました。また、生徒に歴史について興味をもたせるためには、楽しめる授業を考えなければならず、生徒の興味を引きつける楽しい授業をすることはなかなか難しいことがよくわかりました。私としては、この講義は興味のある話ばかりで受講してよかったと思います。

・歴史の授業は難しい難しいと思っていた。あれを教えなければ、これも教えたい、という思いばかりが先行してしまっていた。でも、子ども自身が興味をもてば、自ら調べてみようという力もつく。教師としては、学習意欲を高めるような題材を選び、調べようとする力を育てる学習内容を組み立てていく必要があると思った。実際なかなかできないと思うが、講義でなるほどと感じたことは参考にしたい。

・この講義を受け、社会の授業というものの認識を改めさせられた。どんなに「楽しく」とか「児童の心に残るように」とか言っても、結局は暗記科目であるという考えが心の根底にあり、実際問題として多少はそれを拭いきれない部分があるものの、教師のやり方次第で、児童自らが参加しようとし、教えられるのではなく自らが考え、そしてそれについて論議することが可能だということを知ることができた。自分が教師という立場になったら、こういう授業をめざしたい。

・「歴史にどのような形でもいいから興味をもたせる」という歴史教育の大前提を忘れていた自分に気がついた。歴史を学ぶことを通して人間を学んでもらおうにも、子どもが歴史に興味がないのでは教えようがない。まず歴史に興味をもってもらい、それから人間について学べるような授業をしたいと思った。

・この講義を受けて「歴史」の捉え方が変わったと思う。今までは「歴史」とは教科書をよく読み、その通りの内容を暗記するものであるという考え方を少なからずもっていたが、「歴史」の本当の奥深さが少しでもわかったような気がする。この講義を受けていなければ、いつまでも「『歴史』は暗記」という考え方をもっていたかもしれない。

・私は歴史は嫌い・苦手という意識の人でしたが、この授業を受ける度に「私は間違った教え方を受けてきたんだ」と思うようになり、少し高校の時の先生を恨みました。最初は、歴史の受験勉強に関係のない授業、クイズなどをして何になるのだろうと思っていましたが、その関係のないと思われるところから興味をもたせ授業に導いていくというところはとても感激しました。が、実際私がやるとそう簡単にうまくもっていくことができるだろうかという不安もあります。本当に今回授業を受けて、私にとってとてもプラスになるものをたくさん得ることができました。そして“教師”という道を目指す第一歩を学んだような気がします。

・この授業を通して何度かアンケートをして、歴史の面白さに少し触れたような気がします。高校の授業は教科書を読んでいただけだった。だから、考える想像するといったことはなかったように思います。ただ暗記していただけだった。だから高校では、それまで好きだった歴史が少し嫌になった。こんな人が他にも大勢いると思います。だから教師になれたとしたら、歴史を嫌いになるような授業はしないよう心がけたいと思いました。そし

て、少しでも興味を引くような出来事・人物を見つけて自分なりに調べ考えられるような生徒にしたい、と思いました。そういった点をふまえると、この授業では、様々な質問に対し自分なりに考え想像して答えを見つけていたので、面白かったのだと思います。

・私はこの講義を通じて、歴史の授業はこうでないといけない、ということ学びました。まず、楽しい歴史の授業を行うこと。子どもが興味をもたないような内容の授業を行っても意味がない。歴史を好きになってもらえるように、子どもにとって興味のもてる楽しめる内容の授業をすること。次に、子どもに考えさせること。歴史を教える側が子どもに一定の価値観を植えつけないために。そのためには、教える側は実証と論理を大切にしなければならない。重要な点はこの二点だと、私はこの講義を通じて感じました。

#### 4. 「楽しい（歴史）授業」私見

歴史好きの子どもに育てる「楽しい授業」とは何か、なぜ、それが後回しにされてはならないのか。本稿のこれまでの叙述（＝第7講における先学の主張と筆者のコメントの紹介）は、この問いへの回答をそれなりに明らかにしてきたと考えるものであるが、ここでそれを整理し、そこに覚書き程度ではあるが若干の検討を付加しておくことにしたい。

##### (1) 「楽しい授業」とは何か

「楽しい（歴史）授業」とは、一体いかなるものを指すのだろうか。筆者にとってこの問題を考える手っとり早い実感的な方法は、最終アンケートに示された受講生の意見をもとに「楽しい<講義>」のあり様を分析することである。そこで先に挙げた回答例を見直すと、そこにキーワードとなるものを見出すことができる。すなわち、「アンケートの課題が毎回変なのばかりで面白かった」「私の歴史にたいする考え方をくずされた」「他人の意見で自分が気づかなかったことも知る」「一見あっさりとしたアンケート」「生徒と同じ立場になる」「今まで考えたこともなくさらっと流してきたようなことに注目」「歴史というのはこんなに身近な点から入っていいのか」「講義でなるほどと感じたことは」「少しでもわかったような気がする」「というところはとても感激しました」「自分なりに考え想像して答えを見つけていた」「重要な点はこの二点だ」等である。つまり、これらの受講生にとっては、「身近」で、「あっさりとした」「生徒と同じ立場にな」りうる、「今まで考えたこともない」「変な」問いであったがゆえにアンケートを<楽しみ>、また、そのような性質の問いにもとづいて「自分なりに考え想像」し「他人の意見も知る」機会が提供され、その中で、時として「感激」したり「なるほどと感じ」たり、従来の「考え方をくず」されたりしながら、最終的に「わかったような気がする」、あるいはシンプルに「重要な点はこの二点だ」と捉えうる、そういうものであったがゆえにこの講義を<楽しめた>のである。

そしてこれらは、先に紹介した諸先学の「楽しい授業」に関わる所論とほぼ符合することになる。たとえば、面白いネタ・問題史を重視する有田は、「子どもたちの常識をひっくり返す」ものや「身近な・・・子どもたちの生活に密着した内容」を授業で取り上げることが楽しませることに直結すると言い、モノや絵の持ち込みや制作、演説会や裁判を含む劇化、社会科の枠を越えた総合学習化などヴァラエティに富んだ授業方法を工夫する山本や田所には、「少なく教えて深く考えさせる」や、『『今日は何かあるぞ』と思わせる導入』『難しい（知らない）ことにハッとさせる』の言がある。また安井によれば、子どもが「歴史はおもしろい、楽しい」と言うのは「自らの追求で何かを得られるようなかたち」

になっている時であり、そのためには、題材を子どもの問題意識にそった楽しい絞り込まれたものにし、「共感」を通して他人事・余所事の歴史から脱し、子どもが感じ考えたことを自由に発言できる場を確保することが肝要としている。

ところで、我々は、歴史から様々なことを学ぶことができる。但し、それは、あくまで本人が何らかの課題をもち、主体的に課題解決を追求する限りにおいてである。ところが、この前提、言うなれば主体的な学びというものを、学校（歴史）教育は、あらかじめ決定された内容を上からく与える＜ことをその本質とするがゆえに、本来的に欠いているのである。子どもはその気がなくても、歴史学習の時間がくれば、教師が用意した事柄を学ばねばならない。したがって、そこでは、主体的な学びへ移行させる何らかの“刺戟”が必要となる。「楽しい授業」とはこの“刺戟”の謂に他ならない。あるいは、「歴史から学ぶ」とか「課題をもって」などと構えることなく、より単純に考えるならば、歴史好きの人間とは、英雄憧憬であれ謎解きであれ何らかの意味で歴史を楽しんでいる者を指す。結果として何かを得る得ないにかかわらず、そのプロセス自体が、歴史好きを歴史好き足らしめていると言えるだろう。であるならば、そのプロセスを構成している諸ファクターを授業に取り込むことによって、「その気がな」い子どもにも楽しさの一端を味わわせることができ、＜与えられる＞がゆえの“苦痛”を軽減することも可能となろう。そして、この「プロセスを構成している諸ファクター」に当たるのが、上述の最終アンケート・諸先学の主張から整理した「楽しい授業」の中身ということになるのである。

さて、以上をあえて強引にまとめるならば、「楽しい授業」とは、子どもを主体的な学びへと刺戟するために（も）、徹底して子どもの側に立ちながら、エンタテインメントとしての学習に徹するもの、と捉えられるのではなからうか。とすれば、河崎の以下の発言は、このような把握と共振するものとして再録するに足ることになる。「くらしのなかで目にするもの体験したことのすべてが社会科の対象であるということは、どの子にとっても開かれた窓があるということで、誰でも授業に参加できるし、どの子にもわかる内容を含んでいるということである。・・・社会科の授業ではとくに、子どもの発言はすべて取り上げ位置づけることができる。その場で考えたことはすべて意味があり、それはとても大切なことなのだと思った時、子どもの姿勢は変わってくる。・・・学習意欲に乏しいと思われる子どもたちも、学習の意味がわかり、楽しく気楽に活躍できる場があれば、いきいきと参加するのである。」

## (2) 「楽しい授業」からの逸脱を防ぐための“十戒”——結びにかえて

「楽しい授業」を後回しにする、あるいは「楽しいだけでは駄目だ」と相対化する時、その後回し・相対化の度が進むほど、それは「楽しくない授業」に接近することになる。では、「楽しくない授業」とは具体的にはいかなるものなのか。あるいは、「楽しい授業」からの逸脱をもたらす要素として何が挙げられうるか。本稿最後の課題は、「逸脱をもたらす要素」の検討によって「楽しい授業」のあり様を逆照射してみることである。ただ紙幅に限りもあることから、以下では、その「要素」を箇条書きにまとめ、これを「楽しい授業」からの逸脱を防ぐための“十戒”と称して、そこに若干の解説を付してみることにしたい。その際、“十戒”の対象は基本的に小学校の歴史学習に置くこととするが、内容の大半は中学・高校そして大学の授業に関しても該当するものと考えている。

①中学校で教えるべき内容を小学校に下ろさない

歴史嫌いの子どもにされて進学してくるほど上級学校の歴史学担当教師にとって迷惑なことはないが、この「歴史嫌いの子ども」をつくる一要因として案外気づかれていないものに、上級学校で扱われるべき内容を下ろすという営為がある。子どもがノった時に上級レベルの内容に踏み込むことは時にはありえようが、いつも上級レベルでは子どもはたまったものではない。物足りなさを残す勇気が教師には必要ではないか。

## ② 詰め込まない

安井によれば、中学一年生が最初の授業の時点ですでに、歴史は「ゴチャゴチャいっばい出てきておぼえられない（から）つまらない」と言うそうである<sup>(18)</sup>。このような捉え方が生じた一因として、その子どもが経験した小学校での授業が内容・論点過多の、教師の〈伝えねば〉意識過剰のものであった点が大いに疑われうる。その一方で、〈伝わっていないのでは？〉はあまり自問されることがない。過度の詳説は、たとえそれが誠意から為されたとしても、かえって「ゴチャゴチャ」して意味不明と同義となろう。

## ③ 授業ごとの狙いはシンプルにし、狙い達成を性急に図らない

②と同様の観点から、単元ごと授業ごとの狙いは単純な絞り込まれたものにするのが肝要かと思われる。と同時に、時間に追われて強引に結論にもっていくが如き、性急な狙い達成も避けたい。「終わりよければすべてよし」とは、プロセス軽視・論理的整合性無視の謂ではないはずである。また、狙い達成のためには、導入部の工夫が決定的に重要であり、その意味では、「初めよければすべてよし」とも言えよう。

## ④ 「なぜ？」を「どのように？」より上級の問いと捉えない

「どのように古墳や大仏を造ったか？」よりも「なぜそれらを造ったか、造らせることができたか？」を上質の問いだと勘違いし、小学生に難解な史的意義や背景、概念などを教えようとする授業も楽しいものにはなりえない。子どもが求めない限り「どのように？」だけで授業を構成しても一向に構わない。「なぜ？」を問う場合は子どもの背丈に応じたものにすべきで、「背丈」も一部の優秀な子どものそれであってはならないだろう。

## ⑤ 子どもを圧迫しない。息苦しいだけの授業をしない

ネガティブな史実ばかりを取り上げそこから教訓を得るという授業は、説教臭い、元気の出ない、反省を強いるだけのものとなる。史実によっては、その客観的分析が子どもに無力感・閉塞感を強烈にもたらす点を心得ておきたい。歴史の教訓に事寄せて、現状打開・時代への抵抗など次々と子どもに課題として背負い込ませる授業や、一種の極限状況下での倫理的姿勢を問うて子どもに決意表明させる授業はきわめて疑問である。

## ⑥ 教師の価値観・歴史観を押しつけない。観念先行型の授業をしない

〔歴史観は多用で自由、正しい歴史観などない〕という歴史学歴史教育の基本事項に無知な教師に限って、そも楽しくなければ価値観注入など無理であるのにもかかわらず、子どもに自らの価値観・歴史観を押しつけようとしたり、問題ある（と自分が考える）歴史観の克服に急ぐ。〔歴史を学ばせる理由・意義に絶対的なものも優劣もない〕ことを心得ぬ教師に限って、観念的独善的授業に安住し、「行動をおこす主権者育成が大事」とか「安易な楽しくわかる授業を見直す」などとそれこそ「安易」に言うものである。

## ⑦ 授業の主人公は子ども。子どもの出番を減らしてはならない

河崎が言うように、社会科では「誰でも授業に参加できるし、子どもの発言はすべて取り上げ位置づけることができる」。このことを、現システムの下でつぶれそうになっている子どものためによくよく踏まえたい。子どもの出番を封じ込めた教師中心の一方通行的



授業で伝わるのは、教師の権威か熱意くらいのものであろう。この意味で田所のように、子どもに印象に残った授業とその理由を問う試みは有益である。

⑧(楽しい)授業に対し、暗記(=受験対策)を孤立的対立的に扱わない

私立中学受験を想定するならば、暗記(=受験対策)を考慮に入れない「楽しい授業」論は空論に陥るおそれがある。既述の如く、教師も受験生も、歴史を好きになれば諸知識が自ずと頭に入って楽に暗記できる、暗記が苦にならなくなる点を十分認識する必要がある。加藤好一のように、「年号早おぼえの創作」を学習過程に取り込んで、暗記を楽しませつつ歴史認識の深化を図ることも有効である<sup>(19)</sup>。

⑨歴史学習に過大な任務を与えない——たかだか学校での週数時間の授業である

子どもは自らを取り巻く環境全体から物事を学ぶのであり、「学校知」が知のすべてではない。また、歴史学習は小学校で完了するわけでもない。専門家(=歴史担当教師)の専門への思い入れは非専門家(=子ども)には共有されない。これを忘れた時、歴史学習は自己目的化し分不相応の課題を背負い込むことになろう。教師は自らの大して学びもしなかった小学校時代や自らの知の形成史を回顧すべきではないか<sup>(20)</sup>。

⑩「わかるから楽しい授業」を極力控え、学びの<深まり>を性急に目指さない

楽しいだけでいいのか?は、「楽しい授業」の十分な実践者にしてそこに何か加味する余裕・力量を持つ者が考えればよい問題である。「わかるから楽しい」では失敗した時、「わかる」ための「苦行」しか残らない。また、「荒れ」が激化し学び・教え自体がそもそも成立しがたい状況下、学びの<深まり>は第二義の問題でしかないだろう。問われているのは学びの質ではなくむしろ量であって、「わかる」のレベルを下げ、大半の子どもに「わかって嬉しい」との経験を数多く与えることだろう。研究者・教師の“充実”(=学びを深める研究・実践)は、今やその殆どが子どもの“重荷”でしかない。世上、成功例とされる実践の核心も実は教え・学びの<深まり>にではなく、楽しさの<深まり>にこそ存するのではないか。あくまで楽しさを前提に、子どもの側に立つことを基盤とするがゆえに、「主権者育成」なり「地域に根ざす」なりが活きるのではないか。

今、歴史教育者には、第一義的問題とその他のものとの弁別がきびしく求められているのではないか。私見では、小学校歴史教育上の第一義的ファクターとは、歴史好きの子どもに育てることを目指して「楽しい授業」を工夫することであり、これを追求している限り、その他の狙い・手立ては放念して一向に差し支えないと考える。小学校歴史教育は、狭義の歴史学習の場である学校歴史教育の更なる一部・出発点でしかないのである。

## 註

- (1) 拙稿「現代版・桃太郎ばなしと歴史教育の基礎」本誌9号(1998)、199-215頁
- (2) 拙稿「歴史教育の基礎——歴史観をめぐって」『山口大学教育学部研究論叢』48(1998)、73-90頁
- (3) 本間昇『改訂 小学校の歴史教育』地歴社 1985、16-17頁
- (4) 有田和正「小学校ではおもしろい問題史を」『社会科教育』284(1986年6月号)、43-46頁、および同『授業がおもしろくなる授業のネタ、社会3』日本書籍 1988、4-7頁
- (5) 同論文、45-46頁。同書、72-77頁。ちなみに②の解答は有田によれば「厠かご」だが、「おまる」持参との説もある
- (6) 田所恭介・谷田川和夫『新小学社会の授業・6年』民衆社 1993、59-64頁。本間昇

- 他『1単元の授業・小学社会6年』日本書籍 1990、55-68頁。谷田川和夫「十二単は重くないか」『歴史地理教育』485(1992年3月号)、40-41頁
- (7) 加藤文三他『これならわかる日本の歴史Q & A②』大月書店 1992、82-84頁。田所・谷田川前掲書、96-97頁。なお、註(6)(7)の文献名はすべてプリントに明記し、再度「一度手に取って読み、気に入ったものは購入するとよい」と伝えてある
- (8) 田所・谷田川前掲書、99-101頁
- (9) 山本典人『小学生の歴史教室』あゆみ出版1985、下巻 236-237頁
- (10) 同、上巻 1-4頁
- (11) 田所恭介「歴史に問いかけ学ぶ子どもたち」『歴史地理教育』562(1997年4月号)、20-21頁
- (12) 河崎かよ子「未来に生きる子どもたちに」同 567(1997年9月号)、8-13頁
- (13) 安井俊夫『学びあう歴史の授業』青木書店 1985、はじめにv頁
- (14) 以上は同書特に12、31-32、57、71-73頁、および同「スパルタクスの反乱をめぐる歴史教育と歴史学」(歴史学研究会編『歴史学と歴史教育のあいだ』三省堂 1993 所収)特に93、101頁からまとめた
- (15) 「家康はすごいやつか」は安井前掲書62頁以下、「授業プラン」は同15頁を参照
- (16) この講義で実施したアンケートの課題は以下の通り。①日本の現代を反映させたミニ桃太郎ばなしを創ろう②貝塚から犬だけが死んだままの完全な遺体で出土する理由は？(加藤公明実践再現)③(西欧中心史観的歴史像と客観的歴史像を並べておき)両者を比較せよ④なぜ歴史を勉強するのか、との子どもの問いに答えよ⑤(学習指導要領「指定」の5人を含めて10人の人物を列挙しておき)教科書に載せるべきと考える人物5人を選べ⑥桃太郎ばなしを利用した講義は有益だったか?⑦自分の考える小学校歴史学習の狙いを一、二点挙げよ⑧大名行列中、殿様がトイレに行きたくなった時どうしたか?(有田和正実践再現)⑨十二単の女性が扇をもって顔を隠している理由は?(同)⑩最終アンケート(講義への感想・アンケートへの批評など)
- (17) 成績評価については、講義初回に「出席してアンケートに回答すれば回答内容を問わず満点になる。欠席は1回は認めるが2回以上は減点していく」と述べてある
- (18) 安井『学びあう歴史の授業』8-12頁
- (19) 加藤好一『教師授業から生徒授業へ』地歴社 1997、17-20頁
- (20) 教育学者の村井淳志は「その実践が子どもにどんな『意味』を残したのか」を実践分析の「ものさしとすべきだ」として、著名教師の「元生徒たちからの(彼らに残した意味の深さと質の)聞き取り調査」を行っているが、本文に示した様な見解をとる筆者には理解しがたい主張である。氏の主張の根底には、すぐれた教育実践は学習者に、卒業後十年二十年経った時点でも、「それについて語りたがっているのがふつうである」ような「意味」を残すもの、との捉え方(=思い込み?)がある。学校教育というのはそんなに凄いものなのだろうか。“ただ楽しかっただけで「意味」など感じなかった”(と卒業生に判断された)授業は劣った実践になるのだろうか。氏の主張に基づけば、小学校教師は皆、何らかの「意味」を卒業後二十年経った元生徒にも残すような実践を為さねばならない。でなければ、分析してもらえないのである。そこでは恐らく、筆者が挙げた“十戒”などそっちのけの「強烈な」実践が横行することであろう。村井淳志『学力から意味へ』草土文化 1996、特に11-21頁参照